暇人の暇つぶし

暇人弐号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
暇人の暇つぶし

【Ｎコード】
Ｎ７４９９Ｘ

【作者名】
暇人弐号

【あらすじ】
神の部下のミスで殺され転生なんてありきたりな事になった主人公がネギま！の世界で暴れまわる（？）話

プロローグ（前書き）

初投稿です
あまり期待せずにご覧下さい

プロローグ

「どこだ…ここ……」

目が覚めたと思ったら何もない真っ白な空間なんだが……

「おぉ、やっと起きよったか」

……誰だ？

「ふむ、まぁしがない神とでも言っておこうかの」

頭でも打ったのか？

「失礼な！わしゃマジで神じゃ！」

……そうか…で、その神様（？）が何の用だ？

「まぁ、とりあえず一つ目の用はお前さんへの謝罪じゃな」

謝罪…？何の……

「気付いとらんのか？なら説明しよう……

“お主は死んだのじゃ”」

……やっぱりか

「なんじゃ、気づいておったのか」

まぁ予想くらいならな……神が居てんだ夢か死んだかの二択だろう

「まぁ、分かったのなら話は早いの……ぶっちゃけるとお主が死んだのは…」

アンタの部下のミス、とかだろ？

「お主…無駄に鋭いのう…そうじゃその通りじゃ」

ここまでくりゃ誰でもわかるさ

「そんなことは無いと思うんじゃが…」

でだ、俺の扱いはどうなるんだ？行くのは天国か？地獄か？　はたまた“転生”か？

「本当に鋭いのう」

それくらいだろ、俺に与えられる選択肢は…で、その反応からして俺は“転生”か？

「その話が二つ目の用じゃったんじゃがの、話が早くて助かるわい」

そりゃよかった

「まぁそれは置いといてじゃな」

置いとくのか…

「お主ほど鋭ければもうわかっとるかもしれんが…」

願いをいくつか聞いてくれる、とかか？

「鋭すぎんか？」

……気のせいだろ

「まぁよい、とりあえず聞ける願いは三つまでじゃ」

ポル〇ガみたいだな

「聞く数減らすぞ？」

すまんすまん
願いは三つまでだったな？

「そうじゃ」

じゃあ一つ目……の前に俺はどの世界に行かされるんだ？

「あぁ…確か《魔法先生ネギま！》じゃったかな？」

……あれか、確か正義（笑）の魔法使いがウヨウヨいる世界だったか？

「まぁ、間違っちゃおらんが…」

あの世界なら戦える能力が必要だな…
とりあえず一つ目だ
鋼の錬金術師に出てくる能力を全部使えるようにしてくれ

「全部…とはホムンクルスの体や能力もかの？」

あぁその通りだ、ついでに賢者の石の使用できる回数も無制限でな

「その程度なら問題はないわい」

なら、二つ目だが…
とある魔術の禁書目録の超能力だな

「ふむ、了解した」

で、三つ目は…
他の転生者を絶対に送り込まないでくれ

「フォッ？そんなもんでいいのかの？」

あぁ、もし他の転生者が幻想殺しとかでも持ってたら勝ち目なんて無いからな…

「確かにそうじゃのう」

これで俺からの願いは三ついいんだろ？これで？

「ふむ、オマケじゃ気と魔力、身体能力もＭＡＸにしておいてやろう」

それは助かる

「二度目の生をしっかり楽しんで来るのじゃぞ」

りょーかいした

そこで俺の意識は暗闇に落ちていった

プロローグ（後書き）

感想などはなるべくお手柔らかに…

第1話（前書き）

かなり短いですが一話目どうぞ

第1話

……ここは？

「知らない天井…てか空だな」

そういや転生したんだっけか

「とりあえず能力がどれくらい使えるかの確認でもするか…」

まずは強欲（グリード）の炭素硬化

次に傲慢（プライド）の能力…使い勝手は良さそうだな

怠惰（スロウス）の能力炭素硬化と組み合わせると銃弾みたいになりそうだな…

憤怒（ラース）の能力…目どうしよう？

嫉妬（エンビィ）、色欲（ラスト）は別にいいや

暴食（グラトニー）は…怖いから今度でいいや

「色々と試してみたが…まさかリザさんの狙撃技術もあるとはな…
…」

てか今はどの時代だ？
大戦期は勘弁してくれよ…

「まず街でも探すか…」

見たところ日本っぽいからな…

寺とかあったし

「寺がヤケに沢山あるし…京都か？」

京都なら神鳴流…だっけか？そんな奴らがいたな

「適当に売れそうな物でも錬成して売りさばくか」

貴金属でも錬成して…と
1番近い街まで空間転移（テレポート）で行きますか

～～～移動中～～～

「到着っと……さて、質屋はどこかな？」

あれかな？

～～～換金中～～～

「とりあえず新聞と地図でも買うか…」

さてさて今は何年かな？

「１９９０年か…」

することも無いしな…

五年ほどしたら麻帆良に行くかな？

「そのためにはまず能力を使いこなさないとな」

山に籠もって修行でもすっか…

第1話（後書き）

見切り発車にも程があったと思うが…

後悔も反省もしちゃいないさ！！

かなりグダグダになっていたと思いますが、感想お待ちしてます

第2話（前書き）

テストなど色々あって遅くなってしまいました。

短いですがご覧下さい

第2話

さてさて…あれから数年たったワケだが……

「ここどこじゃい…」

うん、俺迷ったよ……
麻帆良行こうとして完全に迷ったよ……

ん？俺がこの数年何してたかって？
そりゃ弟子とったり、弟子とったり、弟子とった（ｒｙだな（笑）

「まぁ、色々あったねぇ」

と、そんな感じで数年過ごしていざ麻帆良へ！！…って思ったんだが……

「まさか迷うとはね……近くまでは来てっと思うんだがな」

さっき結界っぽいの抜けたしね（笑）
多分あれが学園の結界だろ

「そこの侵入者！」

侵入者ねぇ……麻帆良も物騒だな（笑）

「止まれ、止まらねば…斬る！！」

……警備してる人も物騒じゃん

声的には女の子なんだけどこんなに物騒な女の子なんて原作に……

「いる…ねぇ……」

具体的には人と烏族のハーフの護衛さんですな（笑）

あの子に目を着けられるとは……ツイてない奴も居たもんだ（笑）

「警告はしたぞ、止まらぬならば…」

あれ？殺気がこっちに？

「まさか俺ッスか？」

「お前以外に…誰がいる！！」

うぉ！！マズいって！！いくらなんでも真剣はマズいって！！ほぼ不老不死だから問題ないけど…

「待て待て待て！！別に変な理由で来たわけじゃないんだよ」

「ならばどんな理由があって…！！」

「教師だよ、詳しく説明するならまほーせんせー（笑）だよ」

まぁ、正義（笑）とは違うんだけどね

「とりあえずここの学園長のとこに連れてってくんない？」

「…わかりました」

～～～～～移動中～～～～～

「着きましたここが学園長室です」

なんで学園長室が女子中等部の校舎に？」

「さぁ？それは私にも…」

「あれ？声に出してた？」

「ハッキリと出てましたよ」

「そっか、じゃあここまで案内ありがとね」

「いえ、じゃあ私はこれで」

…うん、じゃあね烏族のお嬢ちゃん

第2話（後書き）

見切り発車すぎて本当にお先真っ暗です…

主人公の名前すらハッキリと決まってない…候補はいくつかあるんだけどねぇ

第3話（前書き）

いつものように短いですが…とりあえず見てあげてください

第3話

そういやアポ無し訪問だけど大丈夫か？

「まぁ気にしても仕方ないか」

コンコン

「失礼しまーす」

ノックはするが返事は聞かない、これが俺のやり方さ！！

「とりあえず仕事くれ」

「…唐突じゃのう」

いきなり唐突な話をする、これが俺の（ｒｙ

「とにかく職と戸籍くれ」

「なんか増えとらんか！？」

思い出したことをいきなり会話に入れる、これが（ｒｙ

「仕方ないじゃん無い物は無いんだよ（笑）」

「むぅ、とりあえず事情はよくわからんが自己紹介でもしてくれんかの？」

おおぅスッカリわすれてたよ

てか、名前どーすっかな…テキトーでいっか

「八代（やしろ）　塔夜（とうや）ッス！！生年月日はわからん！！出身地もしらん！！希望する職は警備員とか！！」

「名前しかわからんかったのじゃが…」

気付かれた！？

だがただではやられんぞ！！

「気のせいッスよ気のせい（笑）」

「まぁ、ええか…お主の希望は警備員じゃったな」

「別に清掃員とか用務員でもいいッス」

基本なんでも出来っからな

「ついでに……夜の警備にも参加しましょうか？」

「…やはりお主も関係者じゃったか」

「あ、バレてました？」

まぁ、わかりやすいようにしてたんだけどね（笑）

「夜の警備をやってもらうにしてもお主の実力が全くわからんからのぅ」

実力…ねぇ……

「少なくともアンタより強いと思うぜ？」

「フォッ！？お主なかなか自信家じゃのぅ」

やっぱ信じちゃくれねーか…

「じゃあ、アンタの次に強い奴でもいい…俺の実力見してやんよ」

「ふむ…なら、また後で…0時くらいに来てくれんか」

「りょーかいッスその間に麻帆良見て回っていいですか」

原作キャラも見てみたいしな

「そのくらいなら別にいいぞい」

「ありがとッスじゃあ俺はこれで」

早速原作キャラ探しの旅へと出発！！

第3話（後書き）

感想、評価などお待ちしてます

第４話（前書き）

またも短いです

誰か俺に文才を！

第４話

さてはて、うろつくとは言ったものの別にすること無いんだよ（笑）

「どっかに知ってるキャラいねーかな」

まぁ、こんなに都合よく見つかるわきゃねーな

とは言えどこに居てるか判明してるキャラも居てるんだが…

「この時間なら屋上か家でサボってるかだよな…」

え？誰のことかって？そりゃあ……

「幼ｊｙ「誰が幼女か！！」……」

マジで屋上だったよ…

「で、何故幼女がこんなとこに？初等部はまだ授業中だろ」

「だーかーら！誰が幼女なんだ！」

「アンタだろ」

「私は幼女では無い！しかも初等部ですらないわ！！」

ヤベェいじるの楽しい（笑）

「そーかそーかじゃあ迷子かな？お兄さんが連れてってやろーか？」

「ま・い・ごでもなーい！！」

「別に見栄を張らなくてもいいんだよ（笑）」

「張ってなーい！！まず（笑）って何だ（笑）って！！」

楽しいけどそろそろやめてやるか（笑）

「まぁまぁ、冗談じゃないか幼女よ」

「……というかお前は誰なんだ…ここまで疲れたのも久々だぞ…」

「べっつに～ただの一般人ッスよ……闇の福音殿？」

「ただの一般人がその名を知っているワケが無いだろう…目的はなんだ？私を倒しにきたか？」

あらら、やっぱりその解釈しちゃいますか…

心外だなぁあんな正義(クズ)と一緒にされるなんて

「いんや、俺はあんな奴らの仲間になった覚えは無い」

「なら…何なんだ？」

うーん…どう答えりゃいいだろ？

『アンタと同じ悪』

てのも違うし…

そうだ！アレで行こう！！

「通りすがりの……幼女の味方さ！！」

「だから！誰が！！幼女だ！！！」

第４話（後書き）

いつも通り感想や評価お待ちしてます

そういや幼女の名前出してねぇ…

第5話（前書き）

相変わらずの大したことのない質ですが…

第5話

さて、散々幼女を弄りまくったがそろそろこっちの目的でも話そうか

「…ここまで弄り倒しといて言うのもなんですが少しこちらの話を聞いて頂けないでしょうか」

「（いきなり雰囲気が変わったな…）ほう、話か…聞くだけ聞いてやる」

「ありがとうございます」

正直、この交渉が成功するか失敗するかで俺の命運が関わってくるからな…

「とりあえずこちらの話は、貴女が所持している魔法球…別荘を貸して欲しいのです」

「待て…なぜ貴様が別荘のことを知っている！？」

「こっちにも色々あるんですよ…」

よもや転生者ですなんて言えるワケがない…いくら自身が吸血鬼だからって信じちゃくれやしないだろうしな

「まあいいが、その内ちゃんと理由を聞かせてもらうからな？しかし、まさかタダで貸してくれ…なんて言わんだろうな？」

「勿論しっかり対価は用意してますから安心して下さい」

「理由のほうは無視か…」

「対価があると言いましても、ここではちょっと…」

「結局全部無視か！？」

とりあえず要件を伝えないとムダに長引きそうだったしな…

「安心してください、しっかり聞いてましたから」

「そ、そうか…ならいいだろう」

（いいのかよ…）

「理由…でしたよね」

「あぁ、まさか言えませんなどとほざいたりせんだろうな」

ここで話してもいいんだけどな…学園長が覗いてるかもだしな…

「言えないことは無いのですが…」

「ここではマズい…と？」

遠見の魔法で覗かれてるか、盗聴器なりで盗み聞きされてるかわからんがとりあえず首肯して答えておく

「ふむ…ならば私の別荘でしっかりと聞かせて貰おうか」

こうして、とりあえず最初の交渉は終了した……

堅っ苦しい喋り方って疲れるな…

第5話（後書き）

これからは……いえ、これからも、ちまちまとした更新になると思いますので辛抱強く待って頂けるとありがたいです…

第6話（前書き）

随分と遅くなってしまいました…

いつもよりは長くなってますが、相変わらず駄文です

見て頂ければありがたいです

第6話

さて…

あれからかなり時間が経ってしまったが…ん？

俺は何を言ってんだ？幼女との「誰が幼女だ！！」…エヴァンジェリンとの交渉からはそこまで経ってないはずだが？

これは…アレか、噂に聞く電波ってやつか

「ところで…さっきはなんで急に叫びだしたんだ？端から見ると痛い子だぞ」

「ふむ…何故だろうな誰かに幼女呼ばわりされた気がしたんだが」

「気のせいだろ……多分」

「ん、そうか？ならいいんだが…」

ちなみに今はエヴァンジェリンの家に向かってる最中だ……ちゃんと授業が終わるまでは待ったぞ？

「で、あんたの家はどこにあるんだ？寮じゃないんだろ」

「もうすぐ着く、黙ってついて来い」

「別に話すくらいはいいだろ…」

「話なら後でタップリ聞いてやるから黙れ」

「……怒ってる？」

「いや、ただ少しムカムカしてな…」

さっき俺が幼女呼ばわりしたことが最大の原因なんだろうがな…

「ん？（ピクッ」

「…どうしたんだ？」

「また幼女呼ばわりされた気が…」

「半分事実みたいなもんだろ、とりあえず早く案内しろや」

「事実って言うな！！幻術さえ使えればどうとでもなる！！」

「ほぼ認めてるようなもんじゃねーか…」

「クッ……まぁいい、着いたぞ！！」

やっと着いたみたいだな…一応原作でも見たが中々いいところに住んでんだな

「どうした、入らんのか？」

「お邪魔させてもらうよ」

おぉ、マジでぬいぐるみで一杯だ…

「そういやこれって自分で作ってんのか？」

「大体そうだが、どうかしたのか？」

「いや、ただ単にスゲーなって思っただけだよ。それより」

「そ、そうか…そんなにスゴいか」

「あぁ、スゴいとおもうぜ？やっぱあれか？１５年も中学生やってっと暇なもんなのか」

「当たり前だろう！！何が楽しくてあんなノー天気なやつらと…それもこれも全部ヤツのせいだ！！」

「ヤツってーと…『サウザントマスター』か？」

「貴様そんなことまで知っているとは…何者だ？」

「とりあえずこの話は別荘入ってからでいいか？」

「フン、まぁいいだろうその辺に座って待っておけ」
「わかった、てかお前は何しに行くんだ？」
「別荘を使うなら探して来ねばならんだろう…まったく、面倒な」
「うん、なんかすみません」
まぁ流石にすぐ見つかるだろ…あ、そういえば
「エヴァンジェリンさんや、あんたのパートナーのドールってどこにいてんだ？」
「そんなことまで知ってるか…本当にお前は何者なんだ？」
「何度も言ってるだろう？その話は別荘でって」
「なら待っていろ、すぐにでも探し出して来てやろう！！」
「走ったら転けちまうぞー…って、遅かったか…」
ビターンって転んどる…あれ、そういやチャチャゼロは一体どこに？
「ココダ、ココ」
「ん？どこだ…声だけは聞こえるんだが？」

…なんか、ぬいぐるみの山から顔だけ見えてるんだが…

なんだあれ？生首か？

「ドーデモイーカラ、早クダセヨ」

「りょーかいした」

とりあえず引き抜いて服を整えてやる

「オッ、気ガキクジャネーカ」

「ついでに酒でもどーだ？」

「ケケケ、話ガワカッテルナ」

チャチャゼロ用？の小さいコップに酒を注いでやる

「安物ジャネーダローナ？」

「疑う前に飲んだらどうだ？お前ならわかるんだろ」

「マ、ソーダナ……ウメーナコレ」

まぁ、この辺で一番高かったの買ったからな…美味くなけりゃ詐欺だろ

「ハァ…ハァ…見つけて来たぞ……って、2人して何をしてる！？」

「何って」

「ソリャ」

「「酒盛りだが／ダロ」」

「そんなもん見ればわかる！！えぇい、私にも寄越せ！！」

「ハイハイ」

全く…幼J「（ピクッ」…エヴァンジェリンはワガママだなぁ

てか、結構早かったな…そんなに気になるか？

「とりあえず別荘に入らねーか？話ながらでも酒は飲めるしな」

「そうだな、よしついて来い」

「ケケケ、オレモ連レテケヨマダ飲ミタンネーンダ」

「フン、知らんわお前はその辺りで転がっておけ！！」
「まあまあ、そんなこと言ってやるなよ」
そう言ってから机に座ってるチャチャゼロを頭に乗せてあげる
「オーイイ眺メダ、ご主人トハ大違イダナ」
「どーゆー意味だそれは！！」
「ソノママノ意味ダゼ」
「なにー！！チャチャゼロそこから降りてこい！！」
「ヤダネ、意外ト居心地イーンダ」
「それは褒め言葉なのか？」
「ソージャネーカ？」
「まぁ、いいやさっさと別荘に入ろうぜ？」
「む、そうだなお前の話もしっかり聞かせて貰うぞ」
「ナンノ話ダ？俺ニモ聞カセロヨ」
「ハイハイ、わかってますよ」

さて、一体何から話せばいいのやら…

第6話（後書き）

もしよければ感想などお願いします

第7話（前書き）

お待たせしました。

いつもどうりの駄文をご覧ください

第7話

前回のあらすじ

チャチャゼロと出会った

「それだけなのか！？」

「どうしたんだエヴァンジェリン、急に叫んだりして？」

「ソーダゼ御主人イヨイヨボケチマッタカ」

「ボケてなどない！！」

ん？今俺たちが何してるかって？

それは……

「オイ、旦那ツイデヤルヨ」

「おぅ、わりーな」

「私を無視して勝手に続けるな！！」

別荘内で酒盛り中だ
ところで…俺の話はいいのか？面倒くさいから別にいいけどさ

「オイ、酒ハモウネーノカ」

「流石に酒盛りになると思ってなかったからな、あまり沢山持ってきてないんだよ」

「そうか…なら、別荘に置いてある酒でも取ってくる」

「頼ンダゼ」

「従者に使われる主人って…どうよ」

「言うな…むなしくなるから」

「ケケケケッケケケ」

「それ以上笑うな、エヴァンジェリンがキレるぞ」

「……酒取ってくる」

あら、拗ねちゃった

それでも面倒だからフォローはしないけどな

そんなことする位ならチャチャゼロと遊ぶさ

「さて、チャチャゼロよ」

「ドーシタ旦那」

「エヴァンジェリンが帰ってくる前に……もう一杯やるか？」

そう言って懐から酒を取り出す

ん？なんでさっき出さなかったかって？

そりゃ、帰ってきたエヴァを弄るためさ

「ケケケ、旦那モ中々アクドイナ」

「そりゃどーも」

数分後…

エヴァが帰ってきた

物凄く息切らしてるだが…そこまで急がなくても

「ハァ……ハァ……取って…来た……ぞ」

「おぅ、お疲れ様」

「思ッタヨリ遅カッタナ」

「……」

「ん？どーしたそんなに小刻みに震えて…風邪か？」

「モシクハ何カノ発作カ」

「風邪でも発作でもない！！何故お前たちは酒を飲んでるんだ！！」

「そりゃ、あったからだろ」

「旦那ノ言ウトオリダゼ」

「なら何故さっき出さなかったんだ！！」

「ど忘れしてたから仕方ないだろ！！」

「逆ギレされた！？」

「ケケケ、旦那ガ理不尽スギルゼ」

「それは自分でも思ったよ」

やっぱり思っていた以上にエヴァいじりは楽しいな

って、あれ？何だか目がうるうるしてるような…

「…グスッ……せっかく急いで…お酒持って……来た…のに」

ヤベェ！！めっちゃくちゃかわいい！！……じゃなくて、どーすんの俺！？幼女泣かせちまったよ！？

「ケケケ、旦那ガ泣カシヤガッタ」

うっせーよチャチャゼロ！！でも泣かしたのはマジだし…

どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうし（ｒｙ

すまん取り乱してしまった……誰に謝ってんだ？謝るならエヴァに……ってそうだった！！泣かせちまったんだ！！うぅ…どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようど（ｒｙ

「オイ、旦那帰ッテコイ」

ゴスッ！

「うっ……俺は…一体何を……」

「御主人ヲドーニカシヤガレ」

「ん？御主人…エヴァンジェリン……はっ！？」

そーだそーだエヴァ泣かせたんだった！！

どうしようどうしようどうしようどうしよ「イイ加減ニシロヨ…」

はい、すみませんでした！！

「まぁ、それは置いといて」

「何ヲダヨ」

「まぁ、それは置いといて」

「ダカラ何ヲダヨ！？」

どうしようか…頭でも撫でてみる？もしくはギュッと抱きしめてみる？……よしっ！両方やろう！！

「うぅ……チャチャゼロにまで…無視…された…グスッ」

「エヴァンジェリン…」

「ふぇ？」

ナデナデ

「ごめんな…無視なんかして」

「ん…やだ、もっと撫でてくれないと許さない」

あれ？なんか幼児退行してねーか？てかヤベーんだが……もの凄くかわいい！！

「エヴァンジェリンそろそろいいか？」

「まだだめ、もっと撫でて」

どーすりゃいいのさ…前世では女の子撫でる経験なんてなかったから対処の仕方がわからんぞ…

「いつまで撫でたらいいんだ？」

「……」

「おーい？どーしたエヴァンジェリン？」

「…スゥー……スゥー……」

寝てるよこの子……まだ出会って1日も経ってないのに…こんなに無防備でいいのか？

第7話（後書き）

感想、誤字脱字などがあればご指摘お願いします。

第8話（前書き）

今年最後の投稿になると思います

今年最後の駄文も読んでいただければ幸いです

第8話

前回のあらすじ

エヴァが幼女になった

「……元からか」

「何言ッテンダ？」

「いや、これどうしようかなって」

「……マァ、ガンバレヤ」

「あのー」

「んー」

「ちょっとどいて」

「いやー」

何だろう…前回よりも悪化してないか？

どんな状況かわからない人の為に説明するぜ！！

今は椅子に座っている俺の上にエヴァが乗ってるんだぜ！！

「……誰に言ってんだ」

「何言ッテンダ？」

「…何でもない」

それよりエヴァどうしよう？何故か「撫でて」みたいな目で見てくるし…

ナデナデ

「～～♪」

撫でたらかなり上機嫌になるし……

チャチャゼロは無視を決め込んで酒飲んでるし…

俺はどうすりゃいいのさ！？

ーーーーーーーーーー数時間後ーーーーーーーーーー

人の理性って意外と強いんだね…あれから何度崩壊しそうになったか…耐えてくれてありがとう俺の理性

満面の笑みで「一緒にお風呂入ろう！！」とか言われたら…悶え死にそうになるじゃないか…入ってないよ？ホントだよ？

ちなみにエヴァは正気に戻ってすぐに崩れ落ちたよ

「なぜ……なぜ私はあんなことを……でも……撫でてもらうのは心地よかっ……って私を何を言って！？」

こんな感じなんだよ

チャチャゼロ？まだ酒飲んでるよ

「そーいえばさ」

「ん？どうしたんだ？」

「俺って自己紹介してなくねーか……？」

「……確かに」

「ケケケ、バカダロアンタラ」

「これは…言い返せん…」

「従者にバカにされた…」

「まぁ…気にするな」

「うん、ありがとう」

あんなことになったおかげか、少し仲良くなれたみたいだ…

まぁ、結果オーライ…かな？

「改めまして、八代塔夜っす」

「ふむ、ならトーヤと呼ばせてもらうぞ？」

「呼び方は何でもいいよ」

「どうせ私たちのことは知っているだろうが一応自己紹介だエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

「ソノ従者ノチャチャゼロダ」

「チャチャゼロはともかくお前はどう呼べばいい？」

「別にどうとでも呼べばいい「じゃあキティで」エヴァだ！！エヴァと呼べ！！てか、どこで知った！？」

「それを知ってる理由を話すためにここに来たんだろ」

「む、そうだったな…よし話せ」

「話せとか言いながら俺の足の上に乗るんじゃねーよ」

「い…いいじゃないか…／／／」

……惚れてまうやろー！！
あれだけツンツンしてたのにこんなデレかたされたら……惚れてまうやろー！！

「って、なんでチャ○カ○イやねん」

「最近あまり見ないな」

「エヴァが知ってたことにビックリだよ」

「御主人ハイツモ暇ダカラソンナンバッカ見テヤガンダヨ」

「なるほどな」

「そんなもの見てなどいない！！」

「…銀○ャリとナ○ツはどっちが好き？」

「断然ナイ○」

「見てんじゃねーか」

「あのボケの多さには惚れ惚れする」

「年末と言えば？」

「ガキ使」

「楽しみなところは？」

「山〇がビンタされるとこ」

「……」

「／／／」

「ケケケケッケケッケケケケケッ」

ナニコレ？なんだかカオスに…エヴァ真っ赤になてるし…チャチャゼロ爆笑してるし…

「まぁ…お笑いって…いいよな」

「そう…だな」

「それよりさ、俺の話はいいのか？」

「今日はもういい…何だか疲れた…」

「そか、じゃあまた明日」

第8話（後書き）

お笑いは完全に筆者の趣味です

感想などお願いします

第9話（前書き）

明けましておめでとうございます。

今年もこの作品をたくさんの人が見てくれることを祈ります。

第9話

前回のあらすじ

やっぱり笑〇飯は面白い

「全く前回の話と関係無いぞ」

「しかも嫌いな人もいてるだろう」

「そりゃそーだろ

それより何でエヴァがここに？」

「／／／」

そうなんです。

起きたらエヴァがいたんです。

……布団の中に。

「／／／」

「……」

これは……あれか？幼児退行の後遺症か何かですか？あのエヴァが

ボソッと「撫でて…欲しいな」とか言ってんだが…なぜか上目づかいなんだが…どうしようか？

ナデナデ

「〜〜♪」

「とりあえずメシ食わねーか？」

「やだ！まだ撫でて！」

「ええ加減にせい！！」

さらに退行してる気がするぞ…

俺はこれでも可愛いからいいけど、チャチャゼロは爆笑してるぞ…主としてそれでいいのか？

「メシ食べようぜ…さすがにそろそろ限界だ」

「ん、トーヤがそー言うならそーする」

「俺達って昨日出会ったんだよな！？」

「そーだよ？」

なら何故こんなに懐かれた？
頭撫でまくったからか？
ぐずってるところを慰めたからか？

なんとも言えん…理由がそれくらいしか思いつかん……俺は…無力だ…。

「トーヤどうしたの？早くご飯食べようよ！！私もお腹が減ったんだよ！？」

「某暴食シスターみたいな話し方をするな！！しかも俺の名前が某不幸少年の名前みたいに聞こえる！？」

ーーーーーーーーーーーー数分後ーーーーーーーーーーーー

「「……」」

「さっきの…何だったんだろうな」

「エヴァが振ったんだろ」

「その……スマン」

「ん、気にするな」

ナデナデ

「と、ところでお前の話を聞かせてくれるのだろう？／／／」

「そうだったな」

「じゃあ、まずお前が別荘を使わせて欲しいと言った理由からだ」

「そうだな…理由としてはまず魔法による覗きの防止だな」

今のところはあの学園長（ジジィ）に教えるつもりは無いからな

あの学園長（ジジィ）に知られたらいいように使われる気がするし…

「魔法による覗き…ジジイか？」

「そのとーり」

あの学園長（ジジィ）６００歳にジジイ呼ばわりされてるよ

まぁ、エヴァは見た目１０歳だから６００歳でも何でもいいけどな

あの学園長（ジジィ）人間じゃないよな？

ぬらりひょんだよな？

あれは人の頭の形ではないよな？

じゃあ木乃香はぬらりひ〇んの孫ってことだよな？

……え？このネタ不味い？
ジ〇ンプだから？
原作がマガ〇ンでジャ〇プのネタは…ダメ…なのか……
え？ダメ…ではない？
もうちょっとメジャーな作品で攻めろ？
それはぬ〇孫に失礼じゃねーか？
てか、頭が後ろに長いキャラなんて他にいるか？

「いない…よな？」

「何の話だ？」

「いや…ぬらりひょんなんて他にいないよな…って」

「あんな妖怪なんてそうそういないから安心しろ」

「だよなぁ」

「そんなことより早く続きを話せ、まさかそれだけの理由ではないだろうな？」

「続きねぇ…別荘に来た理由はもう二つほどあるが、片方はもうどうでもいいんだよ」

「どうでもいい？何故だ？」

「エヴァと仲良くなりたかっただけだからね」

「／／／」

この顔が見れただけでもこの世界に来てよかったと思えるね
でも、まさか一日でここまで懐かれるとは思わなかったけど…
朝起きたらエヴァが布団の中にって…

「最後の理由としては、この別荘を使って修行がしたかったんだよ」

「修行？」

「そう修行です」

「それだけ？」

「いや、こっちにとっちゃ死活問題なんだよ」

そう、神から能力を貰ったものの一切使いこなせていないんです
……スミマセン嘘です。
一切ではないっす。錬金術だけ使いこなせてません
理由？じゃあ、あなたは山の中で普通に焔の錬金術を使えますか？
俺には無理でしたよ
普通の錬金術ならちょっとは使えるんだけどね…
一応、真理は見てきましたよ？ちょっと賢者の石を使って行ってき

ました
俺の賢者の石は神のおかげなのか、特に人の命を使う感じがしなかったのが救いだな
錬成陣無しの錬成は出来るから後は熟練度をあげて実戦で使えるようにしないといけないんだよ

「俺の持ってる能力は多分エヴァと戦っても、いい勝負が出来るくらいの力はあるんだよ」

その気になれば賢者の石を使ったノーモーション錬成も出来るしな

「ほう、なかなか言うじゃないか」

「でも、今の俺には経験がほとんど無い」

「なるほどな…だからここを使って経験を積もうってことだな？」

「修行自体はどこでやってもよかったけどな」

「なっ！？」

「場所は別にどこでもよかったんだよ」

「…どういうことだ？」

「相手が重要なんだよ…修行相手が最強クラスの魔法使いとその従

者なら積める経験も多いだろ」

「そ、そうか／／／」

「そっちが不死なら加減せずに済むし…」

「本音はそれか！？」

「安心しろ…チャチャゼロはなるべく壊さないから」

「そうか、それなら安心……出来るか！！私はどうなんだ！！」

「大丈夫だろ……多分」

「多分って！！多分はヒドくないか！？」

「とりあえず…やろうぜ」

「くっ…いいだろう、私がその生意気な口を閉じさせてやる！！」

まずは焔の錬金術からかな？あとは順次試していけばいいだろ

そういや……不死だ不死だって言ったけど……

暴食（グラトニー）の能力は使っても大丈夫なのかな？

第9話（後書き）

感想など書いて頂けると有り難いです

第１０話（前書き）

少し遅くなりました。

第１０話ご覧ください。

第１０話

前回のあらすじ

実はハラ〇チも好きです

「遂に作者の趣味になったぞ」

「もう、これはあらすじでは無いだろ」

「訳ワカンネーナ」

「それよりも、だ」

「ん？どうしたエヴァ？」

「さっきの術はなんだ！！あの発動の速さで、あの威力は反則ではないか！！」

「あー、あれねぇ…」

エヴァが言ってる術ってのは焔の錬金術のことだよ

え…いつ戦ったかって？

ついさっきけど…

そんな描写無かったって？

それは多分…作者の力不足だよ

どんな戦いだったかって？
うーん…流れとしては

チャチャゼロが飛びかかってくる
←
それを避けて地面に叩きつける
←
エヴァが『魔法の射手』を放つ（割と本気で）
←
地面から壁を錬成して、それを防ぐ
←
それを数回続ける
←
それに苛立ったエヴァが『闇の吹雪』の詠唱を始める
←
飛びかかってきたチャチャゼロを横に蹴飛ばし、発火布の手袋をつけた右手でフィンガースナップ
←
詠唱中で動けないエヴァが爆炎に包まれる
←
チャチャゼロ唖然
←
エヴァ復活
→
今ここ

「一つ言わせてもらうと…」

「なんだ？」

「まだ全力ではない」

「「……」」

あれ？チャチャゼロまでポカンとしてる…なぜ？

「あれで…全力じゃない？」

「あぁ、俺の火力を舐めるなよ」

「ケケケ、リッパナ化け物ダナ、旦那モ」

「自分でも思ったからそれ以上言わないで…てか、これで全力じゃないから…」

「確かにただの人がそこまでの攻撃が出来る…「これで更に死なないとか反則じゃねーか」のは……って、今なんて言った！？」

「ん？反則じゃねーかって言ったが？」

「そこじゃない！！少し前だ！！」

「死なないってとこ？」

「そうだ！お前は人間じゃ無かったのか！？」

「俺は一度も自分のことを人間とは言ってないぞ？」

「確かにそうだが…そのなりで人外だと思うほうが難しいぞ」

そうなんです。今は一応見た目を変えてるんですよ。
この世界に来た時の見た目が、なぜか小さいころのエドだったんだよ。
流石に不便だったから嫉妬（エンヴィー）の能力で姿を変えたんだ。

どんな姿かって？
焔の大佐さんの左目に眼帯を付けた姿ですよ。

……ボソッと「何番煎じだよ」とか言わないで下さいよ…
個人的には『死亡フラグを立てつつも戦地から帰ってきて、結婚して親バカになったものの物語の核心部に迫ってしまったせいで殺されてしまい二階級特進で准将になった焔の大佐の親友』がよかったんだよ。

ただ…あの人が焔を使うとこが思い浮かばなかったんだ…。
十歩…いや百歩譲って思い浮かんだとしよう、だけども！！
手合わせ錬成をする所が一番思い浮かばないんだ！！
なんで俺の想像力はこんなにも乏しいんだ！！

閑話休題（一度使ってみたかった）

スマン、少し取り乱した

後はなんで眼帯を着けているかと言うとだな…。
わかってる人もいると思うが、左目だけにウロボロスの印が現れた…。
どうせなら左手の甲にして欲しかった…。
なぜ左目だけなのかってのは俺にもわからないんだよ。

ただの気まぐれです　ｂｙ筆者

何か嫌なことが聞こえた気がするんだが…。気のせいか？
なら、とりあえずエヴァとの会話に戻ろうか
「外見くらいならエヴァも変えれるだろ？」
「幻術を使えばなんとか…と、言ったところだがな」
「それと似たようなものだよ」
「要するに、それはお前の本当の姿ではないと言うことか」
「そのとーり…いや、どうだろうな…」

…本当の姿ってなんだろな？
この世界に来た時の姿か？
それとも前世での姿か？

…この能力使うとその辺りがわからなくなるな。
正直言って前世の姿に未練は無かったし、この姿に慣れるのも時間の問題だろうから、これが俺の本当の姿ってことでいいのか？

「俺としてはこれが本当の姿みたいなもんだよ」

「要するに、お前の本当の姿はそれだってことだな？」

「まとめるとそんな感じだね」

「それは誰にでも変化できるものなのか？」

「いや、自分で見て得た視覚情報でしか変化はできないんだよ」

「そのあたりが幻術とは違うとこだな」

「それでも変化は完全だからな…多分、今から総理と成り代わっても誰にも気付かれないぞ？」

「それは言い過ぎじゃないか？」

「マジだよ」

「チート……いや、バグだな…どうせ貴様はまだ何かあるんだろう？」

「少なくとも全力を出せばお前には負けないよ…多分」

おそらく『吸血殺し』を使えば一撃だろうし、別に使わずとも『一方通行』を使ってボコってもいいしな。

まぁ、しばらくは超能力は使わず錬金術だけでやっていくつもりだ。理由？わざわざ麻帆等の連中に手の内を明かす必要性がないだろう

「貴様ならやれそうで怖いわ」

「俺としてはエヴァとこれ以上やり合うつもりはないぜ？麻帆等の奴らと協力するつもりもないしな」

「む、なぜだ？」

「第一にあんな正義の魔法使い《バカども》と行動したくない。第二にいざという時に強くて頼りになるような奴が味方のほうがいい。第三にあの学園長（ジジィ）は信用しきれない。これが大まかな理由だな」

「確かにあのジジイは信用できんからな…とりあえずそれで納得しといてやろう」

「さて、じゃあ次はエヴァに別荘を使わせてもらった対価の情報だ」

「そんなものもあったな…」

「聞きたくないなら別に言わないが？」

「そこまで言ってないだろう！！早く話せ！！」

「はいはい…じゃあまず一つ目だ」

「ここまで引っ張っておいて下らない話じゃないだろ「千の呪文の男は生きている（サウザンドマスター）」うな……って、はぁ！？」

「まぁ、これは詳しくはしらん」

「それより何を根拠に生きていると」

「じゃあ二つ目だ「おい…」おそらく来年の冬頃に「話を聞け！！」サウザンドマスターの息子がここにやってくる」

無論、原作知識である。
普通に調べてわかるもんじゃないよ。

「その話の信憑性は？」

「ほぼ確実」

「なぜ貴様はそんなことを知っている？」

「だからそれが三つ目…最後の話だ。信じるか信じないかは勝手にしてくれ」

これを話さないと辻褄合わせがめんどくさいからな…。
まぁ未来人もいるし大丈夫だろ…。

「おれは魔法世界と旧世界を含めた、この世界の住人ではない」

第１０話（後書き）

感想など頂けるとありがたいです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7499x/

暇人の暇つぶし

2012年1月6日01時50分発行